

平城宮第一次大極殿院周辺の調査

—第585次

1 はじめに

本調査は国土交通省による平城宮第一次大極殿院（以下、大極殿院）復原整備事業にともなう発掘調査であり、A～Kの計11トレンチを設定した（図220）。A～Jトレンチは、地下に配管を埋設する予定ルート上のうち、未発掘部分の遺構面の標高を確認するために設定したものである。Kトレンチは、過去の調査（第77・389次調査）では農業用水路の存在により未発掘となっていた箇所の調査のために設定したトレンチであり、大極殿院南門基壇の掘込地業の構造や階段改修の詳細の解明などを主な目的とした。調査面積は合計426.5m²、調査は2017年4月10日に開始し、7月27日に終了した。

以下、各トレンチを大極殿院より西側の1区（A～Dトレンチ）、大極殿院西面回廊付近の2区（E・Fトレンチ）、同内庭部の3区（G～Jトレンチ）、同南門付近の4区（Kトレンチ）に区分し、記述をおこなう（図220）。

なお、これまでの発掘調査の成果により、大極殿院地区の遺構はⅠ～Ⅲ期の大きく3時期に区分されている。また、Ⅰ期はさらに4時期に細分される¹⁾。

Ⅰ期：奈良時代前半。

I-1期…平城宮造営当初。

I-2期…南面回廊を改修し、南門の東西に樓閣を増築する時期。

I-3期…恭仁宮へ遷都した時期。

I-4期…恭仁宮より還都した時期。

Ⅱ期：奈良時代後半。

Ⅲ期：平安時代初期。

今回の報告でも、上記の時期区分を踏襲する。

2 基本層序

各区の基本層序は以下のとおりである。

1区 A～Dトレンチいずれも、上から整備盛土（60～100cm）・耕作土（1層、10～20cm）・床土（複数層、計40～70cm）を経て遺構面（H=67.00～67.20m）に至る。遺構面は、奈良時代の整地土層とみられる均質でしまりが強い灰白色粘土層の上面である。

2区 調査地は大極殿院西面回廊の基壇復原整備箇所にあたるが、基壇の復原整備以前には排水用のU字溝が敷設されていたため、未発掘であった。そのため、整備盛土（最大60cm）やU字溝の据付・抜取埋土（最大120cm）を除去すると、遺物包含層（灰色または褐色の混礫土、約5cm）を経て遺構面に至る。遺構面は褐色～明黄褐色の粘質土（部分的に礫を含む）で、西面回廊基壇土とみられる。遺構面の標高は67.50～67.80mで、東側が高く、西に向かって緩やかに傾斜し低くなる。なお、Fトレンチ北壁の土層観察では西面回廊の下層に大規模な造成土層および地山を確認した。

3区 大極殿院内庭部にあたり、上から整備盛土（30～50cm）・耕作土（10～20cm）・床土（5～30cm）を経て遺構面（標高67.60～68.00m）に至る。遺構面は径3cm前後の円礫を多量に含む砂質土または粘質土層の上面で、I-4期の礫敷面（SH6603C）に相当するとみられる。大極殿院中軸に近い東ほど遺構面の標高は高く、西に向かって緩やかに低くなる。

4区 Kトレンチは大部分が既往の調査区（第77・389次調査）²⁾の範囲内に位置し、また調査前には大極殿院南門の基壇が盛土により整備・表示されていた。そのため、整備盛土・旧調査区埋戻土の直下が遺構面となる。ただし、旧調査時には農業用水路が敷設されていたため未発掘となっていた箇所（東西幅3.5～4.5m）については、水路の据付掘方（埋土は碎石詰めの粘質土）の両脇に耕作土（最大60cm）や床土（最大30cm）が認められる。

遺構面は、南門基壇部分では黄褐色砂質土（南門基壇土）層の上面であり、その北側（大極殿院内庭部）および南側（中央区朝堂院内庭部）では奈良時代の礫敷面とみられる混礫土層の上面となる。標高は、大極殿院内庭部および南門基壇部分が67.80～68.00m、中央区朝堂院内庭部が67.20～67.40mとなる。なお、南門基壇部分の下層では、南門基壇積土や敷粗粒層などを確認した。

3 検出遺構

1区

いずれのトレンチでも顕著な遺構は認められなかったが、奈良時代の整地土層とみられる灰白色粘土層を検出した。標高は、東側のA・Bトレンチが67.00m、西側のC・Dトレンチが67.20mである。

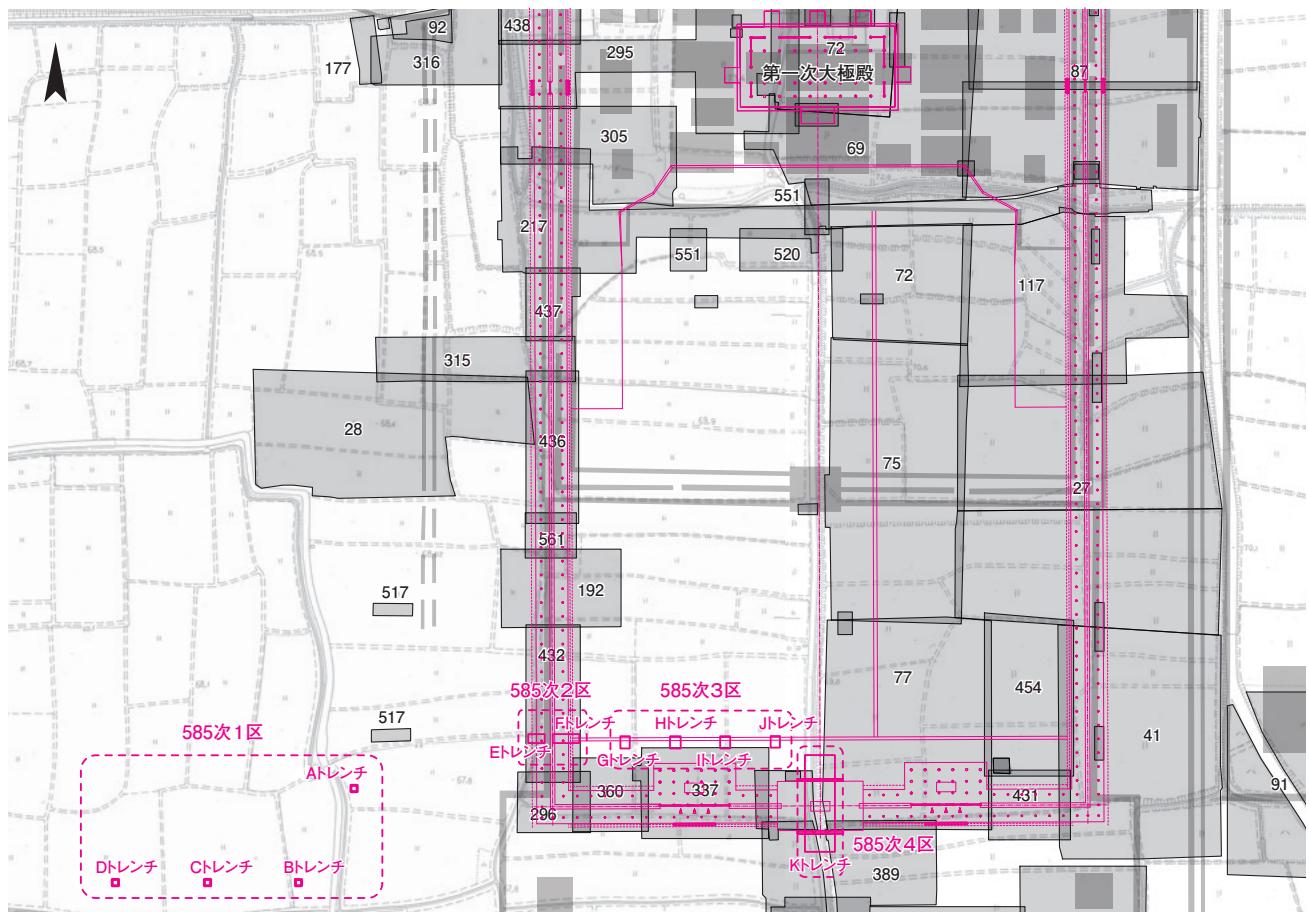


図220 第585次調査区位置図 1 : 2500

2 区

西面回廊SC13400 E・F両トレンチにおいて、大極殿院西面回廊SC13400の一部を検出した。基壇土は褐色～明黄褐色の粘質土を主体とし、部分的に礫を含む。廃絶後に削平を受けているとみられ、礎石の据付・抜取痕跡などは確認できなかった。

Fトレンチ調査区北壁での土層観察では、西面回廊SC13400の基壇に掘込地業がともなうことを確認した(図221・222)。現状で、深さは40～50cm、東端部の座標はY-18,934付近である。なお、第432次調査区の北半以北ではSC13400の東雨落溝SD13401を検出しているが³⁾、その中軸の座標はY-18,933ほどであり、今回確認した掘込地業の東端よりわずかに東側に位置する。そのため、SC13400の掘込地業は基壇の東西幅より狭い範囲にとどまる可能性がある。掘込地業内の積土はやや粘質のある橙褐色土を主体とし、それより東側(大極殿院内庭部)には整地土とみられる黄白色土や暗褐色土が堆積する。

また、基壇掘込地業の下層に、暗灰色～暗青灰色の粘土層が約70cmの厚さで展開することを確認した(図221・222)。この粘土層(特に上半)は地山と見紛うほど均質であるが、標高67.00～67.20mの地点から瓦片2点および土師器片1点が出土したため、人為的な造成土層とみられる。大極殿院の造営に際し、この付近一帯に平坦面を構築するための造成土であろう。その下には、地山の暗青灰色粘土および青灰色砂が堆積する。

南北溝SD20026 西面回廊SC13400のすぐ東側で約2m分を検出した、幅60～90cmの南北溝。中軸の座標はY-18,933付近で、第432次調査区の北半以北で検出した西面回廊SC13400の東雨落溝SD13401のそれとほぼ揃う⁴⁾。ただし、SD20026は深さ5cmほどのごく浅い素掘溝であり、東肩の見切石や溝底の敷石などをともなうSD13401とは様相が大きく異なる。SD13401の石材などが抜き取られたあとのわずかな痕跡である可能性も否定はできないが、現状では両者を同一遺構とみなすのは難しい。

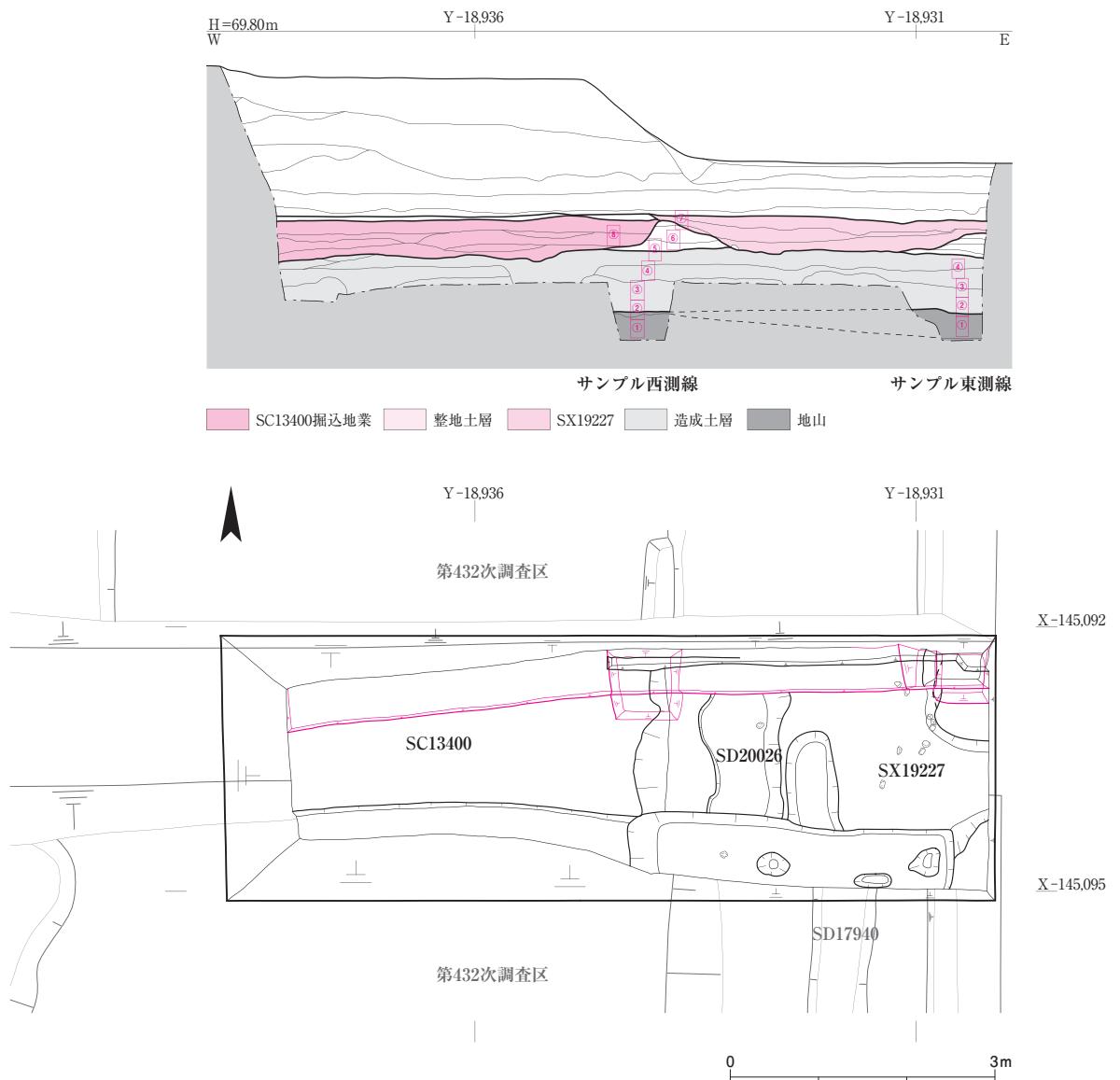


図221 第585次調査Fトレンチ遺構図・北壁土層図 1:80



図222 Fトレンチ北壁土層堆積状況（南東から）

矩形遺構SX19227 第432次調査で検出した矩形の段差。今回の調査では東西約3.8m、南北約2.5m分を検出した。西面回廊SC13400基壇の掘込地業内の積土やその下層の整地土層を掘り込んでいるが、時期や性格は未詳。第454次調査において、大極殿院東南隅付近のほぼ対称位置に類似の遺構SK19310が存在することが指摘され、大雨などにより地面が緩んだ箇所の土を入れ直した土地改良の痕跡などである可能性が示唆されている⁵⁾。

3 区

広場SH6603C G～J各トレンチの全域で、径3cm前後の円礫を多量に含む砂質土または粘質土層を検出した。I-4期の広場（礫敷面）SH6603Cに相当すると考え



図223 SH6603A～C検出状況（北東から）

られる。標高は、Gトレンチが67.60m、Hトレンチが67.60～67.80m、Iトレンチが67.80～67.85m、Jトレンチが68.00mほどで、傾斜は緩やかながら西側ほど低く、大極殿院の中軸に向かって高くなる。

4 区

4区のKトレンチは、調査区内が、①大極殿院内庭部、②南門基壇部分、③中央区朝堂院内庭部、と南北に大きく3分される（図225）。遺構検出面の標高は、①・②が67.80～68.00m、③が67.20～67.40mであり、①・②と③との間に大きな段差がある。

広場SH6603A～C ①において、I期（当該箇所が大極殿院内庭部であった時期）の礫敷面SH6603を3時期分（A～C）確認した。今回の調査では、基本的にこのうちの最上層SH6603C（I-4期相当）まで掘削し、遺構検出をおこなった。一方、第77次調査区ではその下層のSH6603B（I-2期相当）まで掘り下げており、さらに下層のSH6603A（I-1期相当）も部分的に検出している（図223・225・228）⁶⁾。

各時期の舗装に用いられている礫は、いずれも円礫を主体とする。ただし、SH6603A・Bの礫が径10～15cmであるのに対し、SH6603Cの礫は径3cmほどであり、著しく様相が異なる。

礫敷面SX20040 ①の新規掘削箇所（旧水路の東西両脇部分）で検出した最上層の礫敷面で、直下には瓦溜が展開する（図224、I-4期の礫敷面SH6603Cはこの瓦溜の下層に位置する）。この瓦溜は大極殿院（南門）廃絶にともない形成されたとみられるため、その直上に位置するSX20040は奈良時代後半のII期の礫敷面である可能性が



図224 磕敷面SX20040（奥）と瓦溜（北から）

高い。ただし、時期の特定に至るような遺物は出土しておらず、平安時代初頭のIII期、または中世以降に降る可能性も否定はできない。後述する③で検出した礫敷面SX20041と一連の可能性も想定される。用いられている礫は径5～10cmほどの円礫を主体とし、SH6603A・BとSH6603Cとの中間的な様相を呈する。

南門SB7801 ②において、大極殿院南門SB7801の基壇土などを検出した。①と標高がほぼ揃うことから南門廃絶時に大規模な削平を受けているとみられ、礎石の据付・抜取痕跡などは確認されなかった。

第77次調査で実施した断面観察により、南門基壇が掘込地業をともなうこと、掘込地業内の積土を含む広義の南門基壇土が大きく3層から構成されることを確認した（図226）。掘込地業は、北面階段北端想定位置の直下から南面階段南端想定位置の北側約70cmの位置まで、南北約17.8mに渡り施される。深さは40～70cmほどを測るが、北端3m強の部分のみは他より20cmほど深く掘り込まれ、径20cm前後の円礫が敷き詰められる。また、南肩部分にも同様に円礫が詰め込まれている。

基壇土は、大きくは上から黄褐色土層・黒灰色土層・青灰色土層の3層からなる（図229）。場所により若干異なるが、いずれも厚さは20～30cmほどである。青灰色土・黒灰色土が掘込地業内の積土で、最上層の黄褐色土が狭義の基壇土となる。ただし、掘込地業を完全に埋め切らないうちに黄褐色土を積み始めており、黄褐色土層の下半は掘込地業内に含まれる。基壇土のしまりはそれほど強くなく、特に黒灰色土層・青灰色土層の積土単位は10

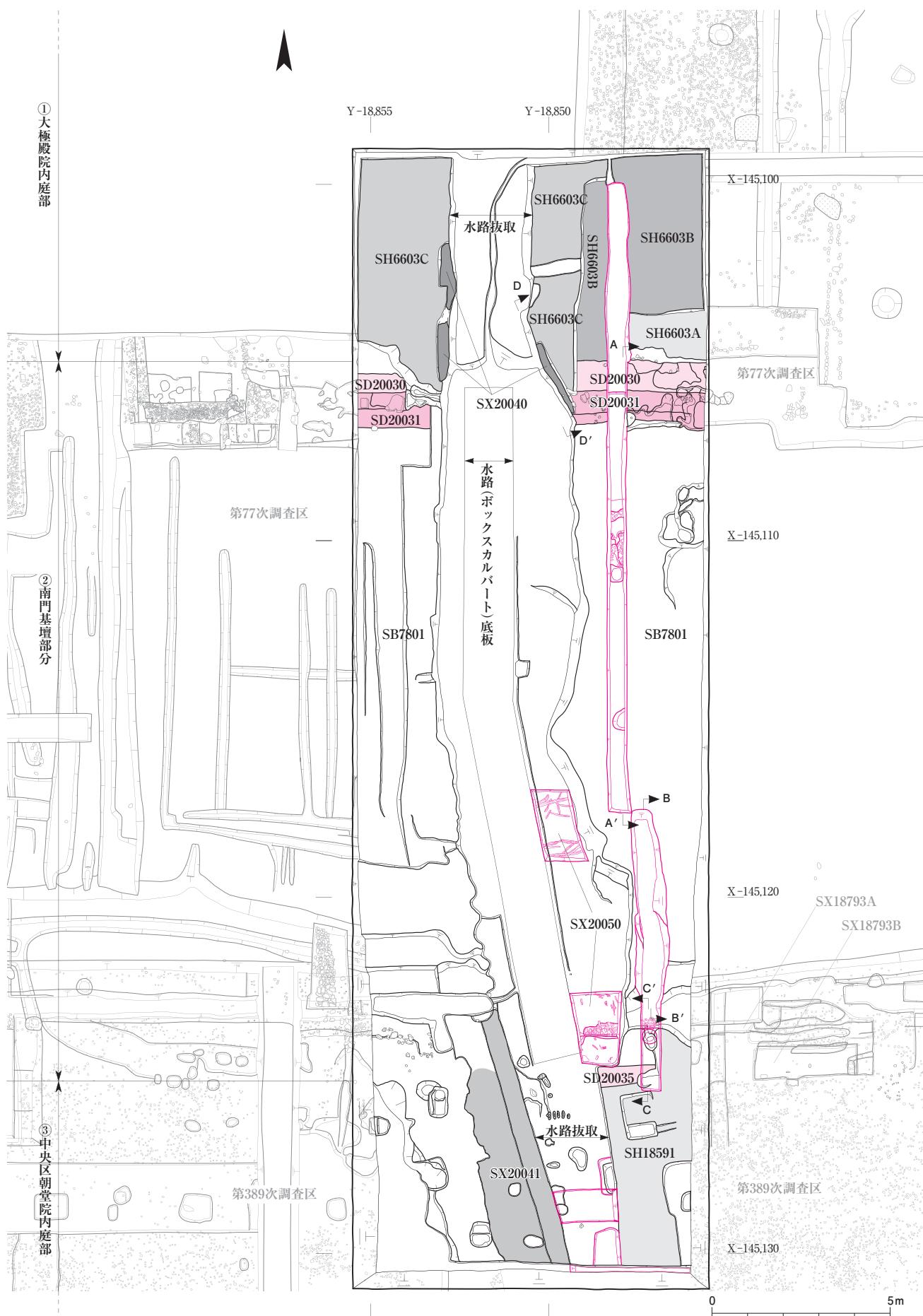
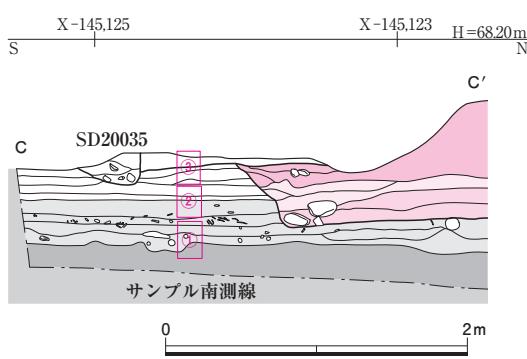
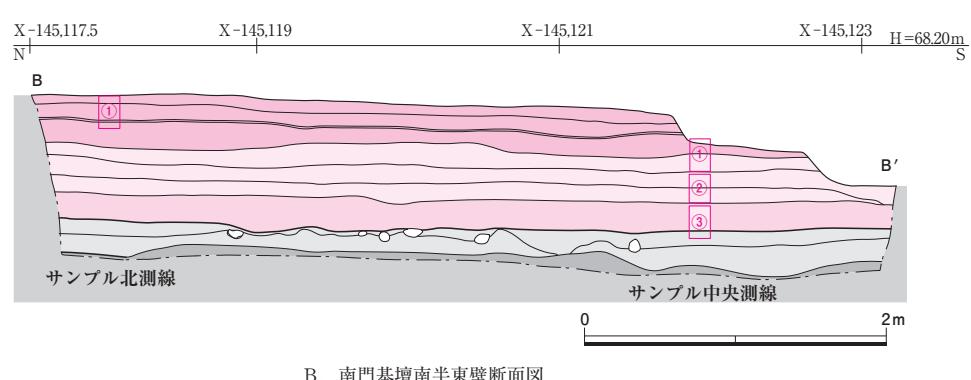
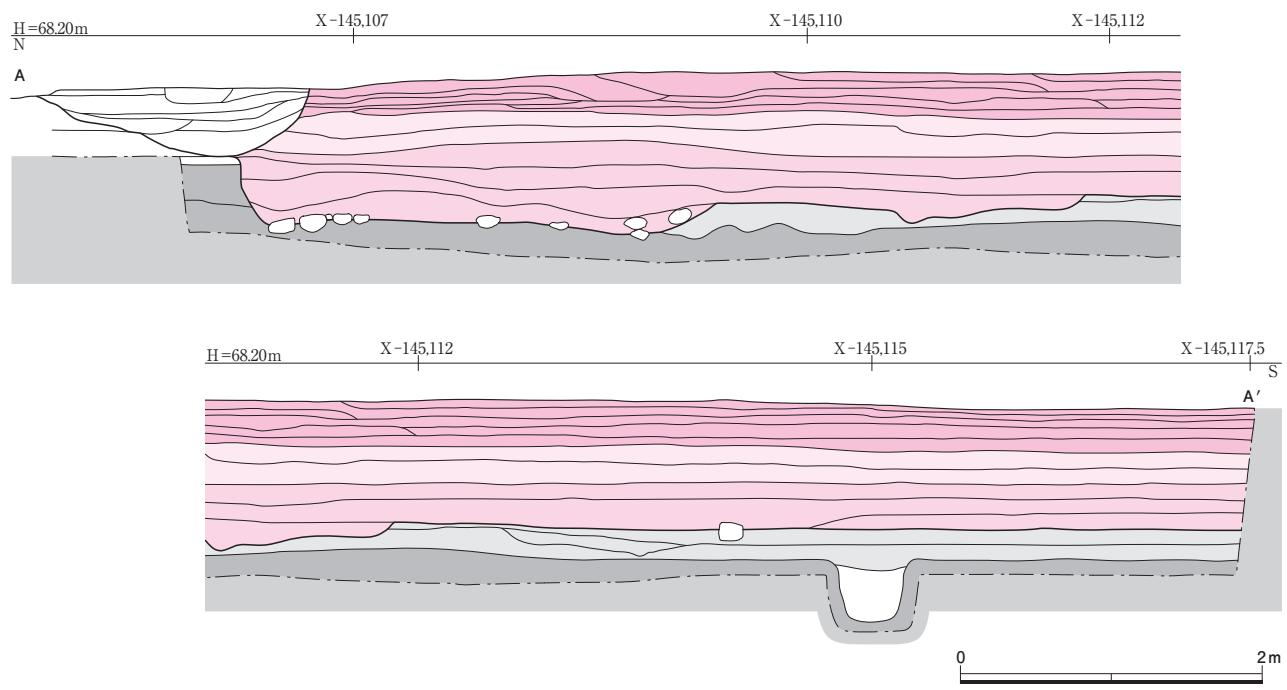


図225 第585次調査Kトレンチ遺構図 1:150



[■] 黄褐色土層 [■] 黑灰色土層 [■] 青灰色土層（以上、南門基壇土） [■] 敷粗粒層（SX20050） [■] 地山

図226 南門SB7801基壇部分南北方向断面図 1:50



図227 SD20030・20031検出状況（北東から）

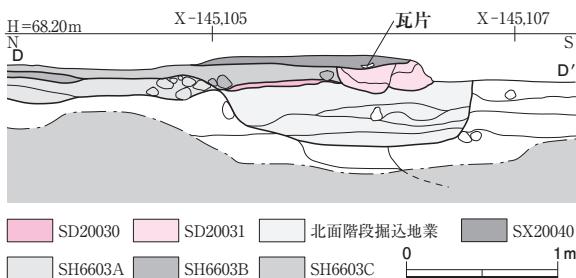


図228 南門北面階段部分断面図 1:50

cm前後とやや厚い。最上層の黄褐色土層は、黒灰色土層・青灰色土層よりは細かい単位(5cm前後)で積まれている。

東西溝SD20030・20031 ①・②境界付近において検出した2条の東西溝(図227)。埋土には凝灰岩の細片や粉末が多く混じり、互いに接しながら調査区を東西に横断する。いずれも幅は0.9mほどだが、SD20030西半(水路以西)は0.5mほどとやや狭まる。断面観察により、SD20030はI-4期の礫敷面SH6603Cに覆われること、SD20031はそのSH6603Cを掘り込み、かつII期の礫敷面の可能性があるSX20040(およびその直下の瓦溜)に覆われることが判明した(図228)⁷⁾。以上の土層状況や検出位置、埋土の様相などから、北側のSD20030が南門創建時の北面階段外装材の抜取痕跡、南側のSD20031がその後に付け替えた北面階段外装材の抜取痕跡と考えられる。SD20030の直上にSH6603B由来とみられる径10~15cmの亜円礫が認められることから、北面階段はI-1期からI-2期に移行する際(東西棲増設時)に改修されたとみられる。

特にSD20031内には大型の凝灰岩切石が多く含まれ、階段外装材に由来する可能性が高い。ただし、いずれも



図229 基壇土および敷粗粒層(SX20050)の堆積状況(西から)

南門廃絶時に一度引き抜かれた材が投棄されたもので、原位置は保っていないとみられる。

このSD20030・20031の下層では、小規模な掘込地業状の遺構を確認した(図228)。南門基壇全体の掘込地業をおこなった後、特に北面階段部分については再度掘削し、地盤改良を施したものであろう。

東西溝SD20035 ②・③境界付近において検出した幅約50cm、深さ5~15cmの東西溝。埋土には白色の凝灰岩片が非常に多く含まれ、その位置からも、南門南面階段の抜取痕跡と考えられる。ただし遺存状態は悪く、水路以東で約1.5m分を検出したのみである(図225・226C・230)。本来はSD20030・20031と同様に調査区を東西に横断していたと考えられるが、水路以西の部分は削平を受けているとみられ、残存しない。

第389次調査では、階段地覆石とみられる凝灰岩破片やその据付溝・抜取溝からなる上層南面階段SX18793Bを検出している⁸⁾。今回検出したSD20035は、その位置から、このSX18793Bに対応する可能性がある。

なお、北面階段部分の下層で検出した階段設置にともなうとみられる掘込地業状の遺構は、南面階段部分の下層には認められなかった(図226C)。

広場SH18591 ③の水路以東で検出した、径5~10cmの円礫を主体とする礫敷面(図230)。南門南面階段の抜取とみられるSD20035がこの礫敷面を掘り込んでいることから、I期・中央区朝堂院内庭部の広場SH18591の一部であると考えられる。

礫敷面SX20041 ③の水路以西で検出した、径5~10cmの円礫を主体とする礫敷面。遺物がほとんど出土して



図230 SD20035 · SH18591 検出状況（南東から）

おらず、またこれを掘り込む遺構なども存在しないため時期の特定は難しいが、(1) SH18591と一体をなすⅠ期・中央区朝堂院内庭部の礫敷面、(2) Ⅱ期・南門廃絶後の礫敷面、(3) Ⅲ期または中世以降の礫敷面、などの可能性が想定される。(2) または(3) の場合は、前述のSX20040と一連となる可能性もある。

敷粗杂層SX20050 大極殿院南門SB7801の下層に展開する、厚さ15~30cmの敷粗杂層（図225・226・229・231）。南門SB7801の掘込地業に掘り込まれていることから、SB7801に先行する遺構であることがわかる。この敷粗杂層SX20050は、場所により遺存状況は異なるが、概ね3層の有機物層から構成される。最下層の有機物層の上に比較的太い枝や丸太が並べられるが、枝同士を編み込むなどの明瞭な構造は認められない。今回の調査区では、南北19m弱分を確認したが、北は南門掘込地業の北端付近の掘込が深まる部分で途切れ大極殿院内庭部（①）までは広がらないことを確認したものの、南は調査区南端以南まで展開すると思われ、全体の規模や範囲は不明である。

（山本祥隆）



図231 敷粗杂層SX20050検出状況（南から）

4 出土遺物

土 器 本調査では、整理用コンテナ1箱分の土器が出土した。これらのうち多くは、Kトレンチから出土した土器である。杯Bが少なからず見られ、飛鳥時代末から奈良時代初の土器が大多数を占めると考えられる。この他に、古墳時代の土器および中近世・近代の土器・陶磁器が混じる。土器の多くは小片のため時期判別が難しい。以下では、比較的残りの良い土器を示す（図232）。

1~3は南門基壇南半の断割調査の際に出土した須恵器である。1は、黒灰色土層出土の奈良時代の杯B蓋。口縁部は緩やかな弧を描いて伸びる。外面には連続的にロクロナデを施す。口縁端部は小さく下方に折れ曲がり、わずかに外反する。復元口径20cm。2・3は、敷粗杂層SX20050から出土した、飛鳥時代末から奈良時代初の須恵器。2は杯Bの高台。やや高い高台外縁が斜め下方に顯著に突出し、外側に踏ん張る。高台端部は、わずかに窪む内傾する面を持つ。3は甕C。口縁部は緩やかに外反し、上端外面は強いロクロナデが施され面をな

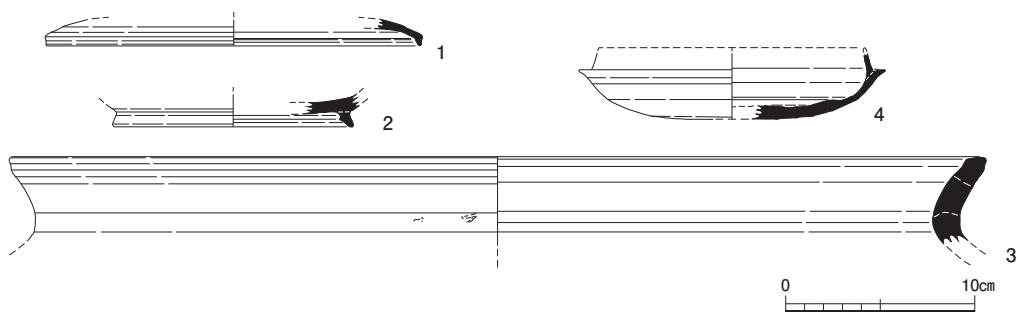


図232 第585次調査（Kトレンチ）出土土器 1:4

す。口縁端部は平坦面をなす。復元口径51.6cm。4は、水路抜取の底面の断面調査の際に整地土から出土した、古墳時代後期の須恵器杯H。ほぼ平たい丸底の底部から緩やかな弧を描いて立ち上がり、蓋受け部がやや上方に鋭く突き出す。口縁部はやや内傾してまっすぐ立ち上がる。口縁端部は欠損する。外面底部にはロクロケズリ調整が施される。MT85型式と考えられ、6世紀後半に比定される。復元最大径16.2cm。

(山藤正敏)

瓦磚類 本調査で出土した瓦磚類を表37に示した。軒瓦はすべて細片で、奈良時代の軒丸瓦はGトレーニングから1点、Kトレーニングから3点出土、軒平瓦6643Cと6664CはすべてFトレーニング、6664KはHトレーニングから出土した。凝灰岩はすべてKトレーニングから出土した。凝灰岩は南門の基壇あるいは階段の外装材であったと考えられる。図233はSD20031から出土した凝灰岩の切石である。b面以外はすべて加工面が残存している。a面とc面の間は幅43cm(約1.5尺)、c面の長さは51cm以上、d面の厚さは19cm以上となる。a面とd面は平坦に仕上げているが、c面とe面には鑿跡が残る。使用時には少なくともc面とe面は基壇あるいは階段の積土と接するように据

表37 第585次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
巴(近代)	1	6643	C	1	面戸瓦	5	
藤原宮式	1	6664	C	4	熨斗瓦	3	
型式不明	3		K	1	磚	1	
			?	2	土管	1	
			中世		凝灰岩	12	
			近世			1	
			型式不明			1	
			時代不明			3	
計			計	14	計	22	
丸瓦			平瓦	磚	凝灰岩	レンガ	
重量	29.852kg	199.914kg	3.491kg	65.499kg	0		
点数	538	4807	6	60	0		

えたと考えられるが、具体的な使用部位は不明である。

(今井晃樹)

5 自然科学分析

本調査では、1) Fトレーニングで検出した西面回廊基壇土の掘込地業および整地土層、さらにその下層の造成土層の堆積構造の検討、2) Kトレーニングで検出した南門基壇部分の堆積構造と築造時期の検討、という大きく2つ

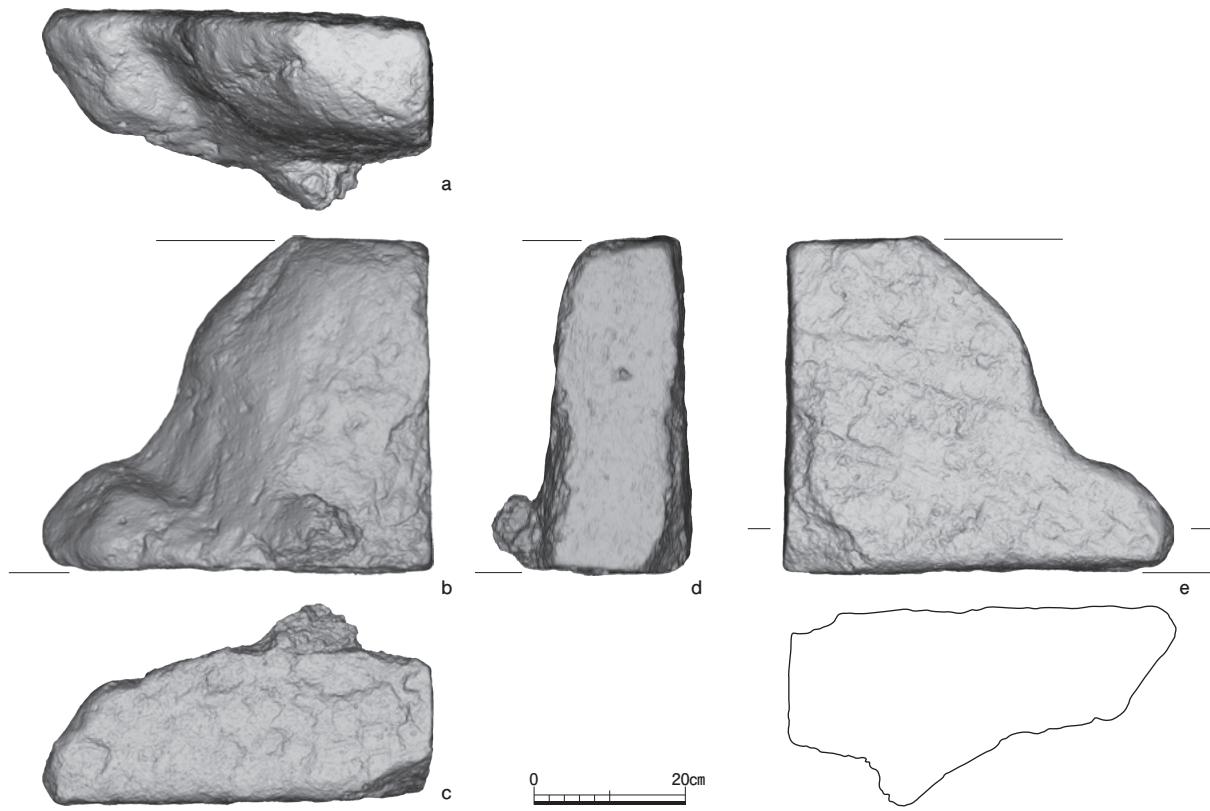


図233 SD20031出土凝灰岩切石 1:10

の課題が挙がった。

Fトレンチでは、西面回廊の掘込地業の下層にいわゆる“地山”と判断されがちな暗灰～暗青灰色泥層が堆積する。しかし、本調査において層中に瓦片や土器片が挟在することが確認され、造成土層としての知見が得られ

た。さらにその下層には、確實に自然堆積層として認識される暗灰～暗青灰色砂泥互層が基盤層として堆積していた。この造成土層は大極殿院造営に向けた平坦面構築のための基礎地業として想定されるが、その工事規模は大がかりなものであり、それにともなう土量規模もかな

表38 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

試料番号 (測定番号)	採取地点	層名	試料別	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
							1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
NH585-AMS1 (PLD-35689)	Fトレンチ 北壁	地山層	有機質 土壤	-24.70 ± 0.26	3577 ± 23	3575 ± 25	1950-1893 cal BC (68.2%) 1981-1881 cal BC (89.5%)	2018-1995 cal BC (5.9%) 1981-1881 cal BC (89.5%)
NH585-AMS2 (PLD-35690)	Fトレンチ 北壁	造成土層	有機質 土壤	-24.75 ± 0.25	3004 ± 22	3005 ± 20	1277-1213 cal BC (68.2%)	1375-1356 cal BC (3.9%) 1301-1189 cal BC (84.5%) 1180-1160 cal BC (3.2%) 1145-1130 cal BC (3.8%)
NH585-AMS3 (PLD-35691)	Fトレンチ 北壁	造成土層	有機質 土壤	-24.10 ± 0.26	2692 ± 22	2690 ± 20	891-880 cal BC (10.4%) 845-810 cal BC (57.8%)	897-807 cal BC (95.4%)
NH585-AMS4 (PLD-35695)	Kトレンチ	黒色土層	木片	-27.93 ± 0.25	1290 ± 20	1290 ± 20	678-711 cal AD (41.5%) 745-764 cal AD (26.7%)	667-726 cal AD (60.0%) 738-769 cal AD (35.4%)

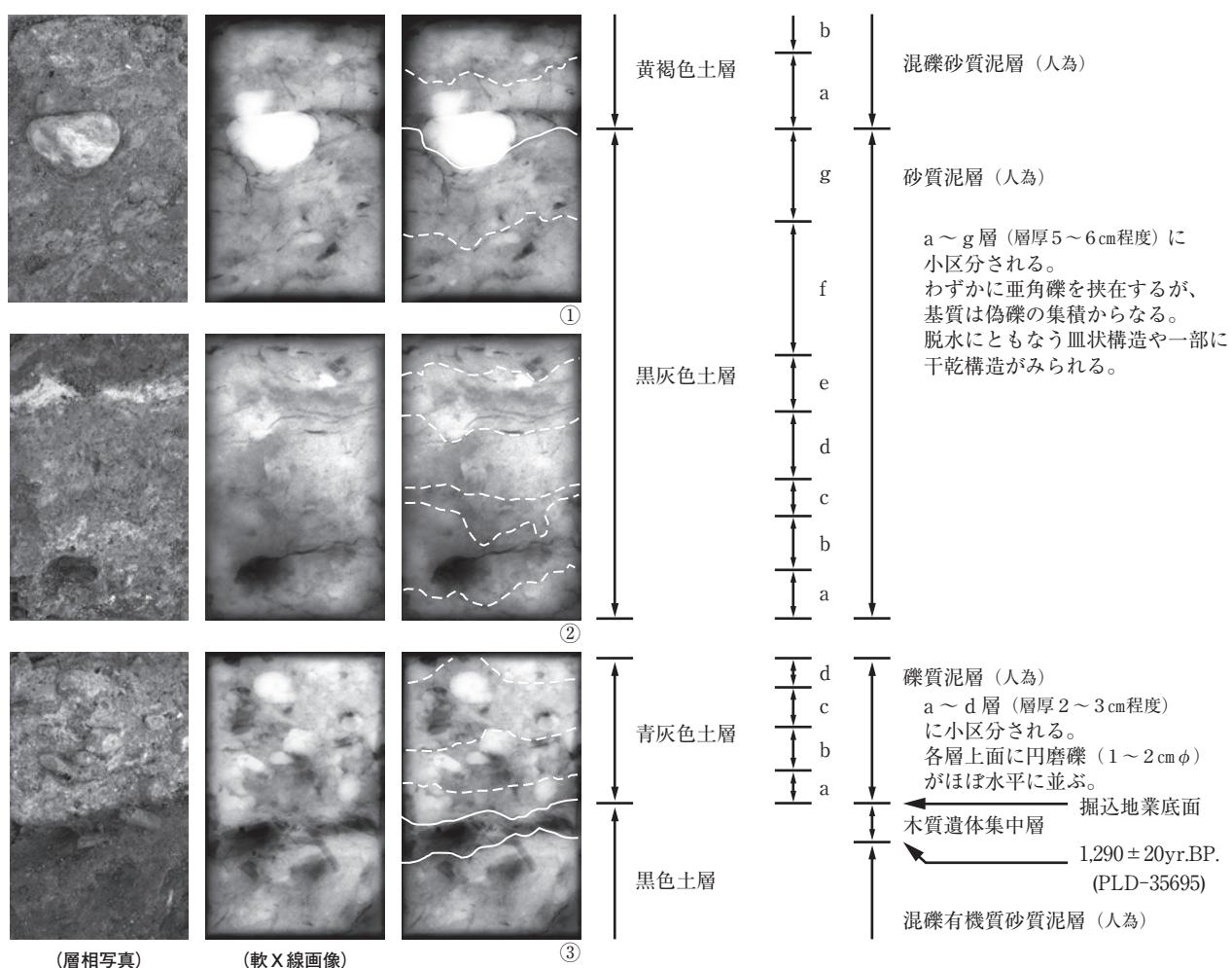


図234 Kトレンチ サンプル中央測線の堆積構造と放射性炭素年代

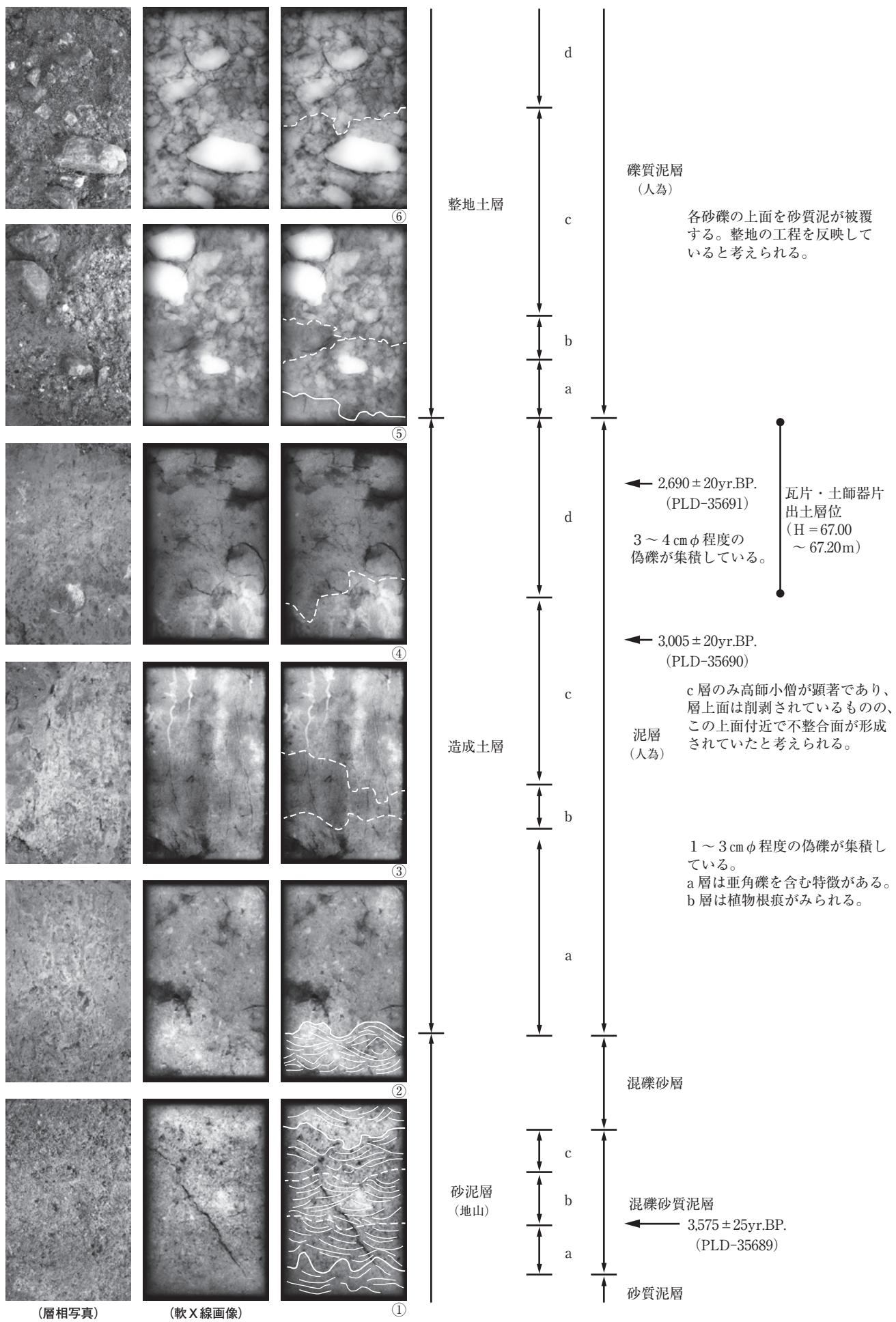


図235 Fトレーンチ北壁の堆積構造と放射性炭素年代

り大きなものとなることが推測される。そこで、改めてこれらの造成土層や整地土層の特性について検討を加えることとした。

Kトレンチにおいても、南門基壇が掘込地業をともなうこと、掘込地業内の積土を含む広義の基壇土が下位より青灰色土層・黒灰色土層・黄褐色土層の3層から構成されることが、発掘調査からあきらかとなった。今回は、これら各層の構造や築造時期について検討を加えた。

試料と方法 以上の課題をあきらかにするために、Fトレンチでは、自然堆積として認識できる基盤層から層位的に連続するように下位より試料①～⑦の採取をおこなった(図221上・235)。このうち試料⑦については、挟在する礫の粒径や密度が大きく試料調整が困難であったため、今回の分析からは除外した。またKトレンチでは、青灰色土層から層位的に連続するように上位より試料①～③の採取をおこなった(図226Bおよび図234)。

その結果、Fトレンチ最下部を除き、ほぼ礫、偽礫を基質とした堆積が認められた。偽礫は地層の中に本物の礫のように紛れ込んだ未固結状の堆積物のことを指す。作土や土木工事といった人為による土壤攪乱の際に形成しやすく、人為形成層を捉える指標の一つである。以下にトレンチ別に結果を示す。

Fトレンチ 堆積層序は発掘調査所見と概ね調和的であり、下位より地山層とする暗灰～暗青灰色砂泥互層、造成土層とする暗灰～暗青灰色砂質泥層、さらに整地土層とする褐色～明黄褐色礫質泥層が堆積する。基盤となる砂泥互層は、ラミナの切り合いから下位より砂質泥層、混礫砂質泥層、混礫砂層に分層でき、混礫砂質泥層はさらにa～cに分かれれるが、基本的に下部にトラクション構造を持ち上位に向かってクロスラミナ、平滑ラミナがそれぞれ発達する流れ堆積物である。上位の造成土層は、おおよそφ2～4cm程度の偽礫の集積によって形成されている。a～dに区分されるが、a～c層の上面はやや硬化した面があり、盛土をしていく際の工程が反映されている可能性がある。またc層は高師小僧の貫進が顕著であり、この上面で植生の繁茂が可能な一時的な地上面があった可能性がある。この造成土と地山層は層相としてやや類似する。そこでこの地山層の堆積時期を検討するとともに、これらの土壤が上位の造成土に混在する可能性を検証するため、(株)パレオ・ラボに

委託し土壤自体に放射性炭素年代測定をおこなった(表38)。測定対象を絞らないため、様々な由來の放射性炭素を計測することになるが、実質的には挟在する花粉の量がもっとも多く、土壤再利用の傾向を捉える上では双方の土壤を簡便に比較しやすく、効果的である。その結果、地山層より $3,575 \pm 25$ yr.BP.、造成土層より $3,005 \pm 20$ yr.BP.、 $2,690 \pm 20$ yr.BP.の年代が得られた。造成土が発掘の成果と堆積構造分析の結果から人為によるものである結論からすると、造成土の年代は大きく古く、この地山土を調整して利用した可能性は高い。その上位の整地土は、偽礫が引き延ばされたような土壤と礫が混在しており、造成土で作土されたような土壤に礫を混ぜ込むような地業がなされた可能性がある。

Kトレンチ 堆積層序は発掘調査所見と概ね調和的であり、下位より青灰色土層とする礫質泥層、黒灰色土層とする砂質泥層、黄褐色土層とする混礫砂質泥層の順に堆積する。全体としてほぼ礫、偽礫を基質とした人為堆積が認められた。青灰色土層は3cm程度ごとに円磨礫を敷き、黒灰色土層は5～6cmごとに脱水凝固させたような灰色の偽礫を挟み、版築ほど精巧ではないものの一定の地業をおこなっている。黄褐色土層の底部には礫を敷き、その上に偽礫混在土を敷いて平滑面を形成するような堆積構造がみられる。また黒色泥層上面の木質遺体の放射性炭素の年代値は、 $1,290 \pm 20$ yr.BP.となり7世紀末～8世紀初頭の値を示し、大極殿院造営にともなうものであると考えられる。

(村田泰輔)

6 まとめ

最後に、本調査の主な成果をまとめる。

各トレンチにおいて遺構面の標高を確認

今回調査したA～Kトレンチのすべてにおいて、奈良時代の遺構面を検出し、その標高を確認した。

大極殿院中軸付近のJ・Kトレンチでは遺構面の標高が68.00mで、そこから西に向かって緩やかに低くなり、西面回廊部分のE・Fトレンチでは67.50～67.80mとなる。院外西側のC・Dトレンチでは遺構面の標高が67.20m、同A・Bトレンチでは67.00mと、さらに低い。

また、Kトレンチ③中央区朝堂院内庭部の遺構面の標高は67.20～67.40mで、①大極殿院内庭部や②南門基壇部分と比較すると60～80cm低くなることも判明した。現

状で②・③間に高低差が認められるため、Ⅱ期以降もこの段差が完全には解消されず遺存していたと考えられる。さらに、南門基壇は削平されているため、本来の基壇上面と朝堂院内庭部との比高はさらに大きい。

以上は、奈良時代当時の地形の状況などを考察するための重要なデータとなる。

西面回廊基壇の掘込地業と下層の造成土層を確認

2区・Fトレーニング調査区北壁の土層観察により、大極殿院西面回廊の基壇に深さ40~50cmの掘込地業がともなうことを確認した。これまで、西面回廊については掘込地業をともなわないと所見が報告されていたが⁹⁾、少なくとも南端付近の一部には掘込地業が施されていたことが判明した。これは、大極殿院回廊造営の具体相をあきらかにするための重要な知見となる。

また、基壇掘込地業の下層に展開する暗灰色~暗青灰色の粘土層は地山と見紛うほど均質であるが、土器片と瓦片が少量出土したことや土壤分析の成果から、大極殿院の造営にともなう造成土層であることが判明した。今後は宮内の他の地点でも、このような可能性を念頭に置きつつ調査を進めていく必要がある。

南門の造営や改造の実態に関する新知見

4区・Kトレーニングにおいて、大極殿院南門SB7801の掘込地業や基壇積土の様相、また北面階段・南面階段の構造などを確認した。

南門SB7801の基壇について、掘込地業の存在とその掘削の様相、積土の単位や積み方の特徴などがあきらかになった。掘込地業は南北長約17.8m、深さ40~70cm（ただし北端3m強の部分のみは深さ80~90cm）を測り、北端の深掘り部分および南肩部分には径20cm前後の円礫が詰め込まれる。掘込地業内の積土を含む広義の基壇土は大きく3層（上から黄褐色土層・黒灰色土層・青灰色土層）からなり、下層の青灰色土層・黒灰色土層および最上層の黄褐色土層の下半が掘込地業内の積土である。黄褐色土層の上半が狭義の基壇土となり、現状では厚さ20~40cmほどが遺存する。

北面階段については、前後2時期分の抜取痕跡（SD20030・20031）を確認したことにより、南門存続中に少なくとも1回の改修がなされていたことが判明した。また、北面階段の下層では階段設置にともなうとみられる掘込地業を検出したのに対し、南面階段には同様の掘

込地業が存在しないことを確認し、両者の施工状況や構造の相違をあきらかにした。

なお、北面階段について、第77次調査などの既往の調査ではⅠ期の礫敷面SH6603A~Cそれぞれにともなう地覆石抜取等の痕跡が遺存し、造営後2回の改修があった可能性が指摘されていたが¹⁰⁾、本調査では1回分の改修痕跡のみを確認し、改修の時期はⅠ-1・2期移行時と判断した。

南面階段についても、第389次調査では地覆石とみられる凝灰岩破片やその据付・抜取溝からなる上層階段SX18793Bを検出し、さらに主として断面調査による断面観察からSX18793Bのすぐ北側に下層南面階段の痕跡SX18793Aを確認したことから、Ⅰ期中に1回の改修がなされた可能性が指摘されていた¹¹⁾。本調査で検出し、南面階段の抜取痕跡と判断した東西溝SD20035は、その位置からSX18793Bに対応する可能性が考えられる。一方、SX18793Aに対応する遺構は見出されず（図226C）、本調査では改修の痕跡は確認されなかった。

以上は、既往の調査所見とは異なる内容も多く含み、大極殿院南門の造営の実相、およびその構造や時期的変遷を究明するために欠かせない新知見といえる。

以上が本調査の主な成果である。特に大極殿院南門SB7801や西面回廊SC13400について、既往の調査所見と異なる知見を得られたことは大きな成果といえよう。ただし、それらを大極殿院全体の理解のなかにどのように位置づけるかは、今後も検討を続ける必要がある。

(山本)

註

- 1) 『平城報告VIII』。
- 2) 前掲註1および『平城報告XI』。
- 3) 「第一次大極殿院回廊の調査 - 第431・432・436・437・438次」『紀要 2009』。
- 4) 前掲註3。
- 5) 「第一次大極殿院広場の調査 - 第454次」『紀要 2010』。
- 6) 前掲註2。
- 7) 図228は、実際には北西-南東方向の断面であったものを、南北方向に投影して実測・作図した。
- 8) 「中央区朝堂院の調査 - 第389次」『紀要 2006』、前掲註1。
- 9) 前掲註1および註2。
- 10) 前掲註2。
- 11) 前掲註8。